



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



トスカニーニはなぜ大指揮者になったのか

1886 年 6 月、当時 19 歳の青年トスカニーニは、リオデジャネイロのオペラ劇場でチェロを弾いていた。イタリア出身の大指揮者トスカニーニは、元は若くて無名のチェリストにすぎなかった。それが突然、指揮される側から指揮する者へ立場が逆転する運命の日がやってきた。その日、ヴェルディの「アイーダ」が上演される予定になっていたのだが、どういうわけか指揮者が突然降りてしまうというハプニングが起きた。指揮者がいなくては演奏ができない。楽員の推薦で、指揮者の役が 19 歳のトスカニーニにまわってきたのである。

彼が推されたのは、指揮者としての才能があるかもしれないと期待されたわけではなく、じつはトスカニーニは強度の近視で、譜面台に置いた楽譜が見えなかった。そのため、彼は自分のパートのチェロだけでなく、すべての楽譜を暗譜していたのだ。オペラは大成功をおさめ、無名の若者は指揮者としての名声を得るきっかけをつかんだのである。・写真はアルトゥーロ・トスカニーニ(Wikipedia より)





スペイン風邪

1918年(大正7年)から3年に渡り猛威を振るった「スペインかぜ(風邪)」は、世界で5000万人以上の死者を出したと言われる(感染者は5億人、当時の世界人口は約19億人)。

「スペインかぜ」は、人類史上最も死者を出したパンデミックであり、日本でも感染が拡大、45万人を超える死者が出た(当時の日本の人口は5550万人)。「スペイン」という名前が付いているが、発生地はスペインではない。初の感染者はアメリカであり、アメリカで発生したという説が有力とされている。第一次世界大戦中、アメリカでは軍の中でインフルエンザが流行していた。そのアメリカがヨーロッパ戦線に参戦し、派遣された軍と共にインフルエンザが海を渡り、世界に広がっていったのである。

しかし、その感染情報は軍事機密扱いとなり各国で情報が隠蔽された。その中で中立国であったスペインが感染症についての情報を発信した。そのため、「スペインで発生したかぜ」と誤解されたのである。

また、「スペインかぜ」は「かぜ」という名前になっているが、正確には「インフルエンザ」である。国立感染症研究所などでは「スペインインフルエンザ」と表記している。

マスクはもともと黒色だった

ウイルスや花粉から身を守るために欠かせないマスクは、最近「黒色」などいろいろな色のマスクが登場している。以前は白色マスクがほとんどであり、「黒色」などカラーのマスクは最近登場してきたと思われがちだが、もともとは黒が主流だった。

日本では明治初期にマスクが登場し、そのマスクの色は「黒色」だった。当時は「白色」のマスクも存在したが、白のマスクは医療用として病院で使用されるとても高価なものだった。





そんな中で、安く手に入るということで一般の人が使用したのが、炭鉱で作業する人たちが使っていた防塵用マスクだった。この防塵用マスクは、汚れが目立たないように黒い色の布を使用していた。1879年(明治12年)のマスクの広告にも黒色のものが掲載されている。

ハゲタカの頭はなぜ禿げているのか

ハゲタカ(禿鷹)は、体は毛で覆われてフサフサしているが、頭だけは毛がなくツルツルしている。ハゲタカの特徴は、毛のない頭と死んだ動物の肉を食べる食性にある。動物の死体を食べる食性は、腐った肉を食べるという意味で腐肉食と呼ばれる。ハゲタカが死んだ動物を食べるのは、体長が1m以上、羽を広げると3m以上もあり、素早い動きが苦手、動いている動物を仕留めることができないためだ。ハゲタカの頭がハゲているのは、「死んだ動物の内臓まで頭を突っ込んで食べるため」と考えられている。

ライオンやトラなどが仕留めた獲物のおこぼれを食べるハゲタカは、その獲物の内臓まで頭を突っ込んで食べ尽くす。この時に頭がフサフサで毛があると、腐った肉や血が頭の毛に付いてなかなか取れず、有害な細菌などの微生物が繁殖してしまう。一方、頭に毛がないと、付いた血はすぐに乾き、直射日光を受けて有害な微生物を退治できる。

ハゲタカは獲物を横取りする悪いイメージがあるが、死んだ動物をきれいに食べ尽くす「掃除屋」であり、自然界の中である意味重要な役割を果たしているともいえよう。

世界十大小説

世界十大小説とは1954年に刊行されたサマセット・モーム(「人間の絆」「月と六ペンス」などの作品で有名)のエッセイの中で選定された以下の古典作品10作を一つずつ取り上げ解説したもの。

トム・ジョーンズ(フィールディング、英)

高慢と偏見(オースティン、英)

赤と黒(スタンダール、仏)

ゴリオ爺さん(バルザック、仏)

デイヴィッド・コパフィールド(ディッケンズ、英)

ボヴァリー夫人(フロベール、仏)

白鯨(メルヴィル、米)

嵐が丘(エミリー・ブロンテ、英)、

カラマーゾフの兄弟(ドストエフスキー、露)

戦争と平和(トルストイ、露)



FIWA®通信「インベストライフ」

トム・ジョーンズが 18 世紀、残りはすべて 19 世紀の作品。個人的にはユーゴー(仏)の「レ・ミゼラブル」(1862 年)が選定されていないのが?である。

(追記)上記で私が読んだのは赤と黒、白鯨、カラマーゾフの兄弟、戦争と平和の 4 作。